

令和 3 年 8 月 19 日現在

機関番号：31604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02077

研究課題名(和文) 社会的養護(里親家庭)から社会に巣立つ若者の自立支援に関する実証的研究

研究課題名(英文) Research on independence support for foster children leaving care

研究代表者

中山 哲志(Nakayama, Satoshi)

東日本国際大学・健康福祉学部・教授

研究者番号：80327262

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：社会的養護に携わる里親(養育里親)に対して、里子の自立支援(リービングケア)に関する意識調査を2度にわたって行った(1回目関東甲信越、2回目全国の里親会から6地区を抽出)。その結果、約7割の里親が18歳では自立できない場合が多く、22歳以降まで継続して養育を行う必要があると考えていた。また、自立支援が必要な里子には「気持ちが通いあう」「相手の思いや気持ちを想像し、理解できる」場や相手、経験が多く必要であり、里親の多くが、里子の自立問題を里子の中に育まれにくい共感性の獲得の課題と重ね合わせ捉えていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究から、自立支援が必要な里子には「気持ちが通いあう」「相手の思いや気持ちを想像し理解できる」場や相手、経験が多く必要であり、里親の多くが、里子の自立問題を里子の中に育まれにくい共感性の獲得の課題と重ね合わせ捉えていることが明らかになった。18歳以降の自立においてその成果に深くかかわる共感性の獲得をいかに支援し促進していくかを明らかにすることが、里子のみならず養育里親の養育の質を高めることにもつながる極めて重要な意味を持っていることが本研究から示唆された。そのうえで、共感性、自立支援をこれまで里親らはどのように育んできたについて、事例研究を通じて明らかにする必要があることが確かめられた。

研究成果の概要(英文)：We conducted two surveys on foster parents involved in social care regarding foster child independence support. As a result, about 70% of foster parents were often unable to become independent at the age of 18, and thought that it was necessary to continue them until the age of 22 or later. In addition, foster children who need independence support need a lot of places, partners, and experience to "communicate with each other" and "imagine and understand the feelings and feelings of the other person", and many foster parents have problems with foster children's independence. It became clear that it was combined with the issue of acquiring sympathy, which is difficult to nurture in foster children.

研究分野：福祉心理学

キーワード：里子の自立支援 リービングケア 里親子関係 共感性 アンケート調査

1. 研究開始当初の背景

(1) 英国におけるリービングケア法では、「養護」認定を受けた子どもに18歳から25歳までケアラーとしての支援が保障されている。わが国の場合、養育里親の多くが里子の自立を見守りながら、養育期間延長の必要性を指摘している。とりわけ里子には人間関係を築くうえで課題があり、自立に向けての準備期間ならびに専門的支援が必要であると考えている。

(2) 里親家庭から巣立つ若者がどのように成人し、どのように自立し、どのような支援を必要としているかに関する調査研究は少ない。里親家庭から社会に巣立つ若者(もと里子)の自立に焦点をあて、求められる支援について検討する必要がある。

2. 研究目的

リービングケア、里親家庭から社会に巣立つ里子にとって、18歳以降の自立が課題となっている。里子の自立支援の課題とは何か、またどのような支援を必要とするのかを里親へのアンケート、面接調査から明らかにする。

3. 研究方法

当初計画では、里親へのアンケート調査、その後その結果を踏まえて面接を直接里親に行う計画であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響から面接を行わず、2度にわたりアンケート調査を実施した

(1)1回目:2018年12月~2019年2月。関東甲信越地区の里親会の協力を得て実施した(配布数1285件,回収率61.8%)。

(2)2回目:2019年12月~2020年2月。東京,沖縄,明石,札幌の4地区の里親会の協力のもとに実施した(配布数787件,回収率48.9%)。

(3)質問内容:2度にわたる調査の質問内容は概ね共通している。(a)里親の基本的な属性 (b)里子Aちゃんの属性 (c)Aちゃんの行動特性 (d)Aちゃんの成長(小学生以上を養育している里親) (e)成人してからのAちゃんの見通し(自立) (f)Aちゃんはどういう子 (g)里親としての気持ち (自立支援,他)。

4. 研究成果

(1)18歳では自立できない

質問項目の(e)「成人してからのAちゃんの見通し」に関して、多くの里親が里子の自立支援に対して高い関心を持っていた。実際に18歳まで養育した経験のある里親は全体に約2割であるが、多くの里親が18歳以降にも強い関心を持ち、「いつまで育てたいか」の質問では、措置解除年齢を超えて「22歳まで育てたい」が65.7%に達する結果を示している。

この結果の背景には、実親に代わり愛情深く育てる経験を持つ里親こそが実感する「里子は18歳では自立できない」との強い思いがある。自由記述にも、措置解除後も、Aに関わる生活面、経済面、心理面から、自立に向けた継続的な支援と関係資源の充実の必要性を訴えている。

【里親の声】

「18歳では自立できない。基本的に20歳までの措置(四年制大学では22歳)。現在19歳の里子委託中だが、まだまだルーツの心の整理中だと感じる。社会や実親への怒り、自分に対する肯定感の低さなど、気持ちの浮き沈みが激しく、不安定な状態。生活が落ち着かないのが実情。里親にその怒りや憤りをぶつけてきます。まだまだ寄り添い、見守りが必要だと思う」

(2)障害のある里子の自立問題

また、通常自立とは異なり、障害のある里子に対する措置解除後の継続的な支援の必要性を訴え、福祉サービス等の関連情報の提供や確実に支援に結びつけられる制度の在り方を求める記述も多い。委託されるAに障害のあることを、当初から知らされていたケースもあるが、多くの里親が養育を通じて悩み、専門機関に相談し診断される場合が少なくない。

【里親の声】

「委託解除後の里子の自立について、もっと支援の手があると良いと思います。特に知的な遅れ、障害を持つ里子の自立の道への相談窓口、支援の制度がどんなものがあるのか全く分かりません。知的障害や発達障害の里子が多いです。かなり里親任せになっていると思います」

里親の多くが、障害の有無に関わりなく、措置解除後の里子の自立への課題に関心を持ち、温かな家庭的な場の提供や関係の継続を期待している。里親の約 60%が「25 歳位まで、元里子の自立を支援する仕組みを作るべきだ」との考えを持っている。週末に通い合える距離に居住し、仮に経済的に困窮した場合は、約 40%の里親が実子と同様な援助を考えている。

(3) 基本的な生活習慣が身につけていない

しかし、里子のなかには自立にとって基盤となる「約束が守れない」「金銭面にルーズである」など基本的な生活態度が確立されていない場合が多い。そのため社会生活に不適応を起こし、それへの対処に追われる里親が少なくない。

【里親の声】

「23 歳の今も里親への暴言、暴力行為が続いている。警察にも相談している。18 歳で解除にはなっているが、育てる、援助するものがないので、やむなく元里親として交流し、金銭的援助もしている。20 歳で成人しての扱いを受け、税金、年金、保険などの支払い義務が発生するが、全て元里親が負担している。

(4) 自立支援に必要なもの

基本的な生活態度と共感性の育成

里親家庭から巣立ち、社会に自立していくうえで、基本的な生活態度の獲得や適切な人間関係の構築に困難を抱えがちな実態があることが推測された。養育里親はこのことを心配し、相互に関わる生活態度と共感性を育むことに関心を持ち、愛情深く、また根気強く養育にあたっている。調査から、共感性が乏しい里子ほど生活態度（育てやすさ）に課題を抱えていることが示された（表 1）。

表 1 育てやすさ × 共感性 (%)

	乏しい	中間	豊かな
全体	25.0	50.0	25.0
とても育てやすい (16.5)	2.2	22.2	75.6
わりと育てやすい (30.8)	8.8	58.8	32.4
やや育てやすい (25.2)	23.5	65.9	10.6
かなり育てにくい (19.3)	52.9	44.1	3.0
とても育てにくい (8.1)	62.1	31.0	6.9

p < 0.001

【里親の声】

「感情の起伏が激しく、何かのきっかけで突然切れたりする時や、良くない行動し、注意（叱られる）されると、手近にあるものを投げたり障子や襖ガラスを壊したりすることが何度か。壊したことについては絶対謝らず、『自分は悪くない』と言い張る。理由を聞いても黙りこむだけで、最後は泣くだけである。本児の意志や想いが全くわからず困ることがある」

【里親の声】

「私たち家族はサリバン先生のように生活の全てを教えてきました。この数年で里子は見違えるように成長し、元気で活発な 5 年生になりました。私が一番感じるのは、彼の心の成長です。嬉しい時に嬉しいと表現でき、挑戦してみたいという心。そしてなんととっても頑張りば報われると感じられる心が育ったということは、彼のこれからの人生にとって、とても大きな収穫であると感じています」

里親の多くが実感として基本的な生活習慣や態度の獲得や共感性の獲得が自立に関わる重要な要因と考えている

里親の声 は、里子の立場にたって、継続してこうした課題に取り組むことの必要性を指摘し

ている。

【里親の声】

「発達障害や愛着障害、そして虐待されてきた子供の関わり方が問題です。施設で担当者が次々と変わり、ちゃんと関係を築けないまま大きくなってしまった子供達は『楽しく食事ができる家庭』にすぐにつながるわけではありません。それなのに、ちゃんと理解されないまま、「可愛くない」「なつかない」と子供のせいにされ、措置解除へ。もっと子供への深い理解と関わり方のスキルを認定研修などで伝えておくべきだと思う」

里親の声は、施設職員として働いた経験に基づいた指摘であり、わが国の社会的養護に重要な役割を担っている里親制度のあるべき方向性として、「里子の立場にたった」養育を進めることの重要性を指摘している。

(5)里子のウェルビーイング

里親が果たしてきているアロマザーな姿勢は、家庭的な温かさの生活環境の提供だけでなく、里子の生涯にわたる人間形成に深く影響を与えている。措置解除となる18歳までにはなかなか解決できない課題に対しては、出来るだけ早期からの課題解決の取組と、それを支援する態勢の充実が望まれる。里子の自立支援には、里子の立場に立った支援が必要であり、里子が「なぜ出来ないのか」に十分に配慮した支援が求められる。実際に里親が経験する養育上の「育てづらさ」に、リービングケアに関わる里親を支援する人々は丁寧に向き合う必要がある。

里親の多くが、里親の声が示唆するように、根気強く里親子関係を育み、相互に共感性が生まれるのを根気強く実践している。安定した生活の中で、心安らく関係性ができてこそ、里子の心の中にウェルビーイングが育まれていく。

里親は共感性が豊かな里子ほど、里子はウェルビーイングな状態にあり、自立において重要なものと捉えている(表2)。

里子の自立支援においては、自立生活にかかわる生活環境に関して、住居面や経済面などさまざまな物的な支援が必要であると考えられるが、人間関係の構築、里子の内面に育まれる心の問題、共感性の獲得が課題になっている。

表2 人への共感性×AちゃんのWB(%)

	共感性の 乏しい子	中間群	共感性豊 かな子
WB上位 群	6.5	43.9	49.5
中間群	21.3	54.9	24.7
下位群	40.2	47.1	12.6
全体	23.6	49.3	27.1

(6)自由記述に示された里親の声

リービングケア、里子の自立支援には多くの人々が関わり、その中でも里親の果たしている役割の大きさを再確認できる調査結果となった。里子の自立支援に関して里親の養育経験から学ぶことの意義は大きい。自由記述には、自立支援に関して次のような事柄の充実を求める声がある。

(a) 具体的なアドバイス、役立つ情報を教えてほしい。相談態勢の整備、充実

【里親の声】

「児童相談所の職員にもっと専門家を増やし、それぞれの職員の専門性をあげてほしい。今のままでは、子供のことを相談しても、具体的なアドバイスや対応法はほとんど返ってこず、結局自分たちで何とかせざるを得ないので。机上の正論を言われても何の役にも立たない」

【里親の声】

「里親が手に負えない里子の場合、専門的なフォローをしっかりと作るべき。里親が困ったらいつでも手を貸してくれる治療者を育たない限り、里親は安心して養育することはできない」

【里親の声】

「里子と同様に、里親も「心のケア」を必要としている」

上記のような指摘に対して、里親同士による語り場は相互に「困ったことが言い合える場」として機能している。

また、制度として里親支援専門相談員制度の充実など、2018年にはフォスタリング機関(里親養育包括支援機関)のガイドラインが示された。自由記述には、関連して、養育経験の豊富な里親による支援、ピアサポートなど、里親を支援する取組みに関心を示す記述も多くみられた。

(b) 研修制度の充実 里子の自立支援プログラムの取組

(a)の内容は、里親が通常の研修の機会を通じて学びたいと考えている内容にも一致するものである。フォスタリングチェンジプログラムを更新研修に取り入れてほしいとか、試し行動についてどう対処すればよいかなど、日常生活場面で生じる具体的な問題について学びたいと考える里親は多く、それらのことが、里子の成長や生活習慣など自立生活につながる内容となっている。

関連して、里親向けに、里子の自立支援をテーマにした研修プログラムが実施されている報告がある⁴⁾。今後ますます同様のテーマでの学習会や研修が開催されていくであろう。

(7) 里子の自立支援を担う里親たち

自由記述にはその他にも、日常里親たちが悩み、課題とする内容の記述が多く見られた。親権問題、経済的負担、苗字(名字)問題、未委託問題(何年も待ち続ける未委託者)などがあつた。

これらの課題は調査を実施した2018年以降、児童福祉法の改正に伴う国の政策にも変化があり一部改善が図られてきた。2019年に出された「社会的養育の推進に向けて」(厚生労働省家庭局家庭福祉課)⁵⁾においても、里親委託の役割の明確化が図られ、委託推進にあたり数値目標が示された。また措置解除後の自立支援についても、推進事業が整備され始め、各地で展開されている「社会的養護支援に関する取組事例」(2020.3)⁶⁾が紹介され始めた。今後の自立支援の推進に向けた種々の取組に大いに期待がかかるが、その際、施設養護とともに社会的養護で重要な役割を担っている里親の養育経験から得られる自立支援に関わる知見を尊重することを忘れてはならない。

今後の研究課題として、コロナ感染症の影響でできなかった里親に対する面接、あるいは可能であれば里子(当事者)に対する面接を実施し、里子の自立支援に関わる課題、とりわけ心理的、内面的な問題にアプローチし、具体的な支援策の構築をめざしていきたい。

< 文献 >

深谷昌志・深谷和子・青葉紘宇(2013)社会的養護における里親問題への実証的研究 福村出版

中山哲志・深谷昌志・深谷和子 編(2018)子どもの成長とアロマザリング ナカニシヤ出版

深谷昌志「里親の養育意識を探るー里子の自立の観点からー」(2019)日本福祉心理学会自主シンポジウム資料,東京家政大学

井出智博・片山由季 編(2018)「子どもの未来を育む自立支援」生い立ちに困難を抱える子どもを支えるキャリア・カウンセリング・プロジェクト 岩崎学術出版社

厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課(2019)「社会的養育の推進に向けて」
www.mhiw.go.jp/content/000474624.pdf

(2019/2/21)

厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課(2020)「社会的養育の推進に向けて」「社会的養護経験者の自立支援に関する取組事例集」82-116 www.mhiw.go.jp/ (2020/8/10)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中山哲志	4. 巻 41
2. 論文標題 養育困難な里子と自立支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山哲志	4. 巻 第41巻
2. 論文標題 養育困難な里子と自立支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	深谷 和子 (Fukaya Kazuko) (00015447)	東京学芸大学・教育学部・名誉教授 (12604)	
研究分担者	深谷 昌志 (Fukaya Masashi) (00031542)	東京成徳大学・その他部局等・名誉教授 (32521)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石田 祥代 (Ishida Sachiyo) (30337852)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	金城 悟 (Kinjyo Satoshi) (70225118)	東京家政大学・家政学部・教授 (32647)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関